

を握つて、暖い春の日の下を静かにゆく姿を見て、私は一種の長閑な嬉しい感があった。そして嘗てある處で、一人の子守娘が、之れと全く同じ筋の狂言を演じて、發見させ方の適當な加減を誤つた爲に、とう／＼四歳ばかりのお嬢さんを泣き出させて仕舞つた光景を思ひ出して、その一寸した心ゆきの足りない處から起つた悲劇に對して、此の快い嬉しい喜劇を「お父さんの成功」と題して見た。

### ○子供ずきの博士

夏の汽車に疲れきつて、若いお父さんも眠りこんで居る。子どもは獨り窓の外など見て居たが、之れも倦きて腰かけの上へ横になつて眠つて仕舞つた。丁度隣の紳士の革靴の上へ小さい足をのせて、頭は下になつて居る。紳士は笑つて見て居たが、讀みかけの新聞を幾枚も折り重ねて、丁度子供用の枕位の高さにして、その子の頭の下へそつと

入れてやつた。子どもは愈々いゝ心持になつて眠込んだ。その小さい足をだん／＼に踏みのぼして無遠慮に紳士の顔の近くへやる。その革靴へ右肘をつけて「エンシエント グリース」( )を讀んで居らるゝ紳士の眼鏡へ、そのよこれたきたない足の裏が、汽車の動搖につれて、將に觸れやうとさへする。紳士はいやな顔もしないで、時々その子の寝顔を見ればほゝ笑みながら、鉛筆を持つては熱心に本へ書き入れをして居られる。

私は丁度そのま向ふに居て、ロッキーマの「子供達の心」を讀みかけて居たが、この紳士が誰れといふことも知らずに無遠慮に汚い足を鼻の前につきつけて居る子供と、それを平氣で寧ろ愉快そうに讀書して居らるゝ此の紳士との對照が面白くて沼津から幾驛の間、とう／＼私にロッキーマを讀ませなかつた。

その紳士といふは博士號二つ有たるゝ子供ずきの方である。